

論文名：Hotz 床併用二段階口蓋形成手術法により管理した片側性唇顎口蓋裂患児の  
5-Year-Olds' Index による咬合評価

新潟大学大学院医歯学総合研究科 顎顔面口腔外科分野

氏名 結城 龍太郎

---

【要旨】

新潟大学医歯学総合病院顎顔面口腔外科（以下、当科）では、1974年の開設以来、チームアプローチによる一貫した管理体制で口唇裂・口蓋裂治療にあたっている。1983年からHotz床併用二段階口蓋形成手術法（以下、二段階法）を採用しているが、過去に2度、言語成績の向上を目的に手術プロトコルを変更している。これまで、言語評価と上顎歯列模型の形態分析から治療成績の向上を報告してきたものの、咬合という観点からは検討されていなかった。そこで今回5-Year-Olds' Indexを用いて咬合関係を評価し、2度の手術プロトコル変更の妥当性を検証した。

対象は、当科で治療した片側性唇顎口蓋裂の1次症例のうち、資料の整った97例である。97例は、軟口蓋形成術の術式と硬口蓋閉鎖術の時期により、①P+5群：1983～1995年に軟口蓋形成術を1歳半にPerko法で施行し硬口蓋閉鎖術を5歳半に鋤骨弁法で施行された23例、②F+5群：1996～2009年に軟口蓋形成術を1歳半にFurlow変法で施行し硬口蓋閉鎖術を5歳半に鋤骨弁法で施行された49例、③F+4群：2010～2017年に軟口蓋形成術を1歳半にFurlow変法で施行し硬口蓋閉鎖術を4歳に鋤骨弁法で施行された25例の3群に分類し、比較検討を行った。

5-Year-Olds' Indexの結果、各群のスコアは、P+5群：2.65、F+5群：2.77、F+4群：2.80であり、t検定において各群間に有意差はなかった。また、国内他施設との比較において、3群いずれも遜色のないスコアであり、特徴としていずれの群においてもスコア5はなかった。

以上のことから、当科で行った手術プロトコル変更は、これまでの言語成績の向上の報告を踏まえると、二段階法の特徴である良好な咬合関係を維持し、言語成績の向上に寄与した変更であったことが示された。